東京ジャーミイ金曜日のホトバ
2009 年 3 月 13 日

オスマン朝は帝国であったのか

親愛なるムスリムの皆様。西洋国家は、「帝国」と「帝国主義」という言葉の相互の近さをもとに、歴史上の大きな国々を帝国と定義しています。歴史上、この特性にあてはまる国は存在したことがあったとしても、一般的にイスラーム国家をこの名で呼ぶことは正しいことではありません。今日は特にオスマン朝にふさわしい呼称について考えて見たいと思います。特に西洋の人々は、この国家について言及する時には、「オスマン帝国」という名称を用いています。しかしオスマン朝は自らを帝国としてではなく、「オスマンの崇高な国家」と呼んでいたのです。

帝国には支配する側の民族と、虐げられる側の民族が存在するのです。統治者、知事、司令官、上級役人などは常に支配側民族の出身です。しかしオスマン朝では、宰相や大臣、将軍、そして外国に駐在する大使の多くはトルコ人ではありませんでした。オスマン朝にはアルメニア人の大臣や将軍すらいたのです。

帝国では支配民族は、支配下にある地域のあらゆる資源や富を非常に用意に手に入れ、豊かな暮らしをし、支配下にある民族から搾取していました。しかし、最も重要な使命をアッラーのご命令を伝えることであると見なしていたオスマン国家がそのような政治を行なったと主張することが誰にできるでしょうか。例えば、オスマン朝はイエメンに、その地のコーヒーを搾取し、石油を手に入れるために進出したのではないのです。そもそも石油は２０世紀になってから発見されており、オスマン朝はイエメンの石油に一切手をつけていませんでした。オスマン朝はイエメンでバーブ・ル・マンダブ湾を抑えており、１６世紀にはポルトガル人が、その後にはイギリス人が紅海に進出しマッカやマディーナを占領することがないようにと多くの殉教者を出しているのです。またインド洋では、１６世紀の海で大きな力を持っていたポルトガル人と戦ったピリー船長、サイド・アリー船長、ムラド船長のような水兵たちが、インドやマレーシア、インドネシアからヒジャーズ地方に巡礼に訪れるムスリムたちの安全のためにその海域をおさえていたのです。１５６７年、マラカとアチェのスルタン・アラッディン・カッハールの要求に従い、二艘の船と何百もの兵士がその地域のムスリムの力を強める目的で派遣されています。その地域を手に入れて搾取しようというような計画はそこにはありませんでした。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。帝国による支配では、支配民族の言葉が他の民族にも強制されます。例えばアフリカの社会を考えて見てください。フランスの支配下にあったアルジェリアとチュニジアでは、フランス語を知らない人が仕事に就くのはほとんど不可能といっていい状況でした。ソビエト連邦においても他民族に属する人々はロシア語を学ばなければなりませんでした。オスマン朝においてはトルコ語を他民族に強制するどころか、クルアーンの言葉であるという理由から教育に用いられる言葉として６００年近くアラビア語を用いてきました。トルコ語もアラビア文字で書いてきたのです。アラビア文字はアラブ人ではなくトルコの書道家によって最も美しく書かれるようになりました。さらにオスマン・トルコ語では、アラビア語起源の言葉の数がトルコ語起源のものよりも多かったのでした。アラブ諸国をオスマン朝から切り離しその地域を植民地にし、アラブの兄弟たちにオスマン朝を植民地主義者だと教え、教科書にもそのように記載させているイギリスやフランスの支配者たちの中に、アラブの名を持った者はたとえ一人であっても含まれていたでしょうか？そのようなことは思いもよらないでしょう。しかしオスマン朝の多くの支配者の名前はアラビア語起源です。イギリスやフランスが教育施設で、教育言語として英語やフランス語の代わりにアラビア語を用いることは考えられるでしょうか？英語やフランス語がアラビア文字で書かれることは考えられるでしょうか？

オスマン朝を「帝国」と定義し、それを「帝国主義の」国家として示すことは、真実とは折り合わない中傷です。今日のフトバをクルアーンの、過去の民族についての非常に興味深い章句で締めくくります。「これは過ぎ去った民〔ウンマ〕のことである。かれらにはその稼いだことに対し、またあなたがたにもその稼いだことに対し（応報があろう）。」（雌牛章第１３４節）イスラームへの奉仕によって誉れを得ているすべての個人・民族にアッラーがお慶びくださいますように。